

篠山城跡におけるアカミミガメの低密度管理移行～外来種防除を継続する体制づくり～

山口 達成（農都ささやま外来生物対策協議会/丹波篠山市役所）

はじめに

兵庫県丹波篠山市にある篠山城跡では、2014年からミシシッピアカミミガメ *Trachemys scripta elegans*（以下、アカミミガメ）をはじめとした外来種防除を市民・事業者・専門家等の協力のもと行っている。この取り組みの結果、防除開始前に消失していた南堀のハス *Nelumbo nucifera*（品種名：篠山城蓮）は2019年に再び開花し、2023年には堀全体を覆うまで回復した。こうした一方で、アカミミガメの捕獲数は減少し、捕獲努力量あたりにかかる防除費用の増加と、防除にあたる人員の確保が課題となっている。

根絶から低密度管理へ

活動当初は、捕獲罠や堀のかいぼり等の外来種防除によりアカミミガメの根絶を目指してきた。その結果、アカミミガメ捕獲率は一定水準まで低下したものの、根絶には至っていない。

こうした状況下においては、多量の努力量を投入して外来種の根絶を図る選択肢も考えられる。一方で、根絶を目指し続けることは、限られた予算と人員に対して過大な負担を強いることになり、結果として防除活動そのものの持続性を損なうリスクがある。篠山城跡においては、現実的かつ持続可能な防除体制を構築するために、目標を「根絶」から「低密度管理の継続」へと転換し、現在に至る。

指標に基づく段階的防除

低密度管理を実現するためには、限られた予算と人員で効率的に防除を継続できる体制の構築が不可欠である。そこで本協議会では、低予算・低人員で実施可能なモニタリング指標を設定し、その数値が一定基準を超えた場合に捕獲圧を再度高める段階的防除手法を構築している。

具体的には、日光浴罠によるアカミミガメの捕獲率（日光浴罠 CPUE）と、ハスの推定被覆面積割合の2つを指標として設定した。これらの指標は、継続的な測定が容易であることに加え、外来種の生息状況と保全対象種の回復状況を直感的かつ客観的に把握できる利点がある。また、過去のデータとの比較も可能であり、防除効果の検証にも有効である。

2つの指標に加えて、アメリカザリガニ *Procambarus clarkii* の捕獲数やアカミミガメの目視数等、設定した指標以外の項目についても、可能な範囲で調査を実施している。これらの結果を総合的に評価し、専門家から対策の妥当性や必要な努力量等について意見を聴取できる体制を整えた。

本協議会では、この体制に移行してから3年が経過した。防除活動の必要性と成果を明確に示すことで、外部資金も安定して獲得できている。今後も指標を中心にモニタリングを継続し、現場作業に係る労力と費用を抑えつつ、「アカミミガメの低密度管理の継続」と「ハス保全」という二つの目標の実現を目指していきたい。